

災害時支援に関する調査及び実践の研究

～地域の子育て家庭に向けて～

神奈川県相模原市 社会福祉法人ムクドリ福祉会 幼保連携型認定こども園 むくどりこども園

副主幹保育教諭 和田裕美恵

保育教諭 一泉 知広

幼保連携型認定こども園 むくどりこども園の概要

定員 135 名 現員 120 名 職員総数 36 名

設立年月日 昭和 46 年 4 月 1 日 むくどり保育園 平成 30 年 4 月 1 日 幼保連携型認定こども園へ移行
相模原市の概要（平成 31 年 3 月 1 日現在）

人口 722,033 人 保育所数 公立：25 施設（児童保育園 1 施設含む）、私立：75 施設 計 100 施設
認定こども園：幼保連携型 公立：1 施設 私立：30 施設 計 31 施設 保育型 私立：1 施設

1、はじめに

「平成」という時代を振り返るとたくさんの災害が発生した時代であった。代表的な例では東日本大震災や熊本の地震、西日本豪雨などは記憶に新しいのではないだろうか。災害が起こらないと言われていた地域での災害が増えているため、同じく大きな災害を経験していない私たちも危機感を覚えた。こうした背景があるなかで、今回の研究テーマである「地域の子育て家庭への支援の充実」について職員一同で話し合った際、災害への備えが大切ではないか、また、地域の方と互いに顔が分かる関係が大事なのではないかという意見がでた。さらに私たちが出来る支援とはなんだろうと検討したところ、自園が『災害時乳幼児支援ステーション※』であるという事を改めて意識した。※以降、ステーションと略称で記載する。

ステーションは平成 27 年当時の相模原市私立保育園園長会が主体となり開設されたものであり、市との『災害時の育児支援に関する協定』を締結している。これは公立園も同様である。このステーションとは、『一つひとつの保育園が地域の中で連携しあい、保育園の施設や人材を活用して地域子ども達に支援の手が差し伸べられるような仕組み』とステーション解説・運営マニュアルに書かれている。このステーションを園として充実し機能的にしていく事が地域の子育て家庭への支援の充実に繋がると考えた。

2、目的

『災害時に備えて、地域の子育て家庭に対する支援をより充実したものにする』

3. 方法

(1) 実践研究

- ・フレンドシップデー（地域交流日）を企画・実施。
- ・「こども園」として地域の人々と互いにつながり顔見知りになる。
- ・「ステーション」の存在及び役割を知ってもらい、災害時に備える。

(2) アンケート調査

- ・災害時にどう備えているか調査する。
- ・どのような事に不安を感じているのが調査し、それを基に支援方法や方針を決定する。



4. 内容

(1) 実践研究

『自園がステーションという事を地域や在園の方に知ってもらい、地域の方と共に防災意識を高める』

仮説①

- ◆フレンドシップデー（地域交流日）に参加してもらった事で、在園の保護者や地域の方の防災知識が高まるのではないかと。



4. 内容

仮説を基に他園にインタビュー



自園で出来ていること、出来ていないこと
地域に向けて発信する事を話し合った。

更に！ 保育者の災害時支援に向けた知識を高める為に
防災マスターの方を招き研修を行った。

※防災マスターとは・・・防災知識の普及を進めるための講師

- ・研修で得た知識やアンケート結果を踏まえて職員で話し合いを重ねた。その結果、いくつかのコーナーを設け、フレンドシップデー（地域交流日）を実施する事となった。

炊き出し 防災グッズ製作 親子で防災 防災に関する展示

4. 内容

炊き出し



- ・災害を想定して、災害用備品で実際にかまどに火を起こして、味噌汁を作りました。味噌は、園で子ども達と仕込んだ物を使用した。職員が作業している様子が気になり、保護者や子ども達が声を掛けていた。



- ・保護者の方に配布したのは「おにぎり」と「味噌汁」。どちらも好評の声をいただいた。

4. 内容

親子で防災

どのようにしたら防災について学んでもらえるか話し合っていた結果、親子で楽しい時間を過ごしながら学んでもらおうという事となった。

- ・和式トイレでの排泄が行えるよう、踏ん張る力をつけるためにタイヤを持ち上げる遊びの取り入れ。
- ・災害時、身体を守るポーズとしてダンゴムシのポーズ（主要な血管を守る姿勢）が身につけられるようにダンスを考案し、親子で踊る。
- ・レジ袋などが災害時にどのようにおんぶ紐や靴として代用できるのか、ゲーム形式にして実際にやってもらう。
- ・防災に対する備えを職員による劇や防災マスターの講演で、保護者に伝える。



4. 内容

防災グッズ製作

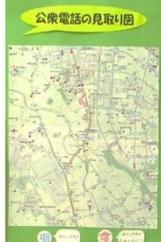


- ・職員が講師となり、防災グッズを保護者の方、子どもと一緒に製作。作るのが好きな子どもたちは、見本と見比べながら真剣に作っていた。実際に作ったスリッパを歩いて部屋の中を歩く姿が見られた。
- ・保育者が作った今回作成した防災グッズの作り方をまとめた冊子は好評で、予定していた数はあっという間になくなった。



4. 内容

防災に関する展示



4. 内容

非常時においしく栄養がとれるアレンジレシピ



4. 内容

フレンドシップデーに参加して役に立った事はありませんか？

- ・公衆電話のマップは、今までに見たことがなかったからためになった。
- ・ダンゴムシのポーズ（主要な血管を守る姿勢）が子どもに伝えやすく、ダンスで楽しくできたので良かった。
- ・被災地での避難所で実際にあったことを聞いて、危機感を覚え対策をしっかりとしようと思った。



参加人数：69名（大人57名、小学生12名） 回答数68件（回収率98.6%）

4. 内容

フレンドシップデー（地域交流日）を終えての課題



防災の観点

災害時乳幼児支援ステーション

災害時乳幼児支援ステーションの機能の充実という観点よりも、防災の観点の方が強くなってしまった。開催に向けて準備や調べ物を進めていくうちに、伝えたい項目が増えていき、防災に関する内容が増えていった。

4. 内容

(2) アンケート調査

- 目的
- ・ステーションをより充実させるため、どのような支援をすれば良いのかを探る。
 - ・どのような事が望まれているのかを調査する。

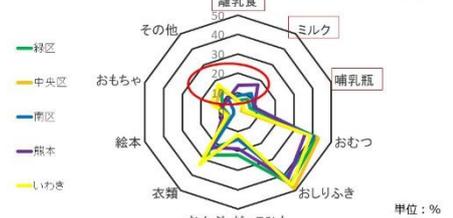
- 仮説②
- ◆被害に遭っている地域は防災知識が高く、災害に備えて準備もしているのではないかと。
 - ◆同市内でも防災に対する意識などで、違いがあるのではないかと。

アンケート実施区画

相模原市（緑区・中央区・南区）・・・各2園
熊本市・・・2園
いわき市・・・1園

4. 内容

Q-1 子ども向けに用意している物があれば教えてください。（複数回答可）



地域に関わらず、準備の比率が近い事、そして離乳食やミルクなどを備蓄している家庭が少ない。子どもの成長に合わせて用意すべき物が変わってしまう為、備蓄していくのではないかと考えられる。

4. 内容

Q-2 災害時伝言ダイヤルの番号を知っていますか？

伝言ダイヤル

	保護者	保育者
知っている	19%	35%
知らない	81%	65%

- 課題
- ①保護者への周知
 - ②伝言ダイヤル以外の情報伝達手段の模索（SNSやメールなど）

4. 内容

- ◆被災地の声（地域特性）
- 被災地では災害時にガソリンが必要 → 車移動が中心の地域では、ガソリンスタンドにガソリンが届かなくなった事で、緊急時に備えるようになった。



被災地の声（その他）

- ・届く物量はパンが多く、アレルギー児がいる家庭では食べられない物もあり、困った。
- ・子どもが騒いでしまう事があり、避難所に行く事ができず単内生活だったので大変だった。
- ・保育園に通っているので子どもが避難しているのが情報がなく不安であった。
- ・飲み水はあったが、風呂水などの生活用水が足りなかった。
- ・避難時における地域や、近隣の方向士の助け合いがあり、とても助かった。

4. 内容

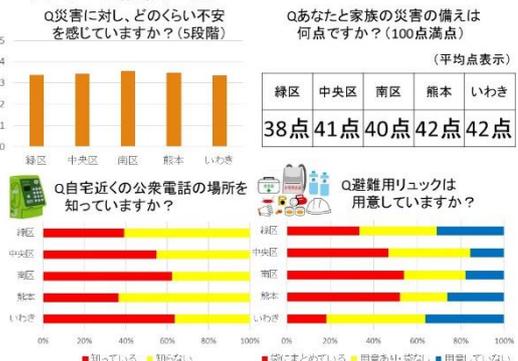
仮説②に対する結論

- ◆被害に遭っている地域は防災知識が高く、災害に備えて準備もしているのではないかと。
- ◆同市内でも防災意識に地域差があるのではないかと。

想定したほどの地域による大きな差は出なかった。
→個人や地域の結びつきに影響されると考えられる。

- ・様々な災害を経て、技術や対策が進化してきた可能性もある。
- ・被災地でも自治体の防災対策がしっかりしていたため、あまり備蓄をしていなくても大丈夫だったという意見もあった。

アンケート結果（一例）



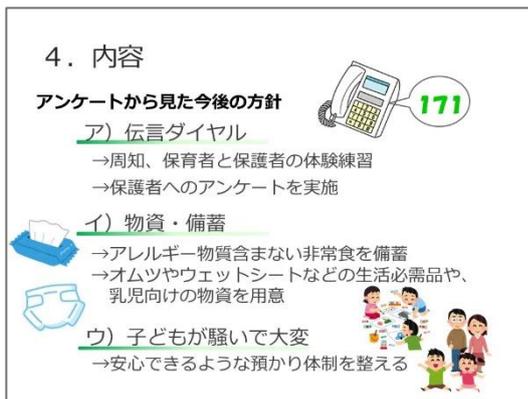
4. 内容

アンケートから見た今後の方針

ア) 伝言ダイヤル
 →周知、保育者と保護者の体験練習
 →保護者へのアンケートを実施

イ) 物資・備蓄
 →アレルギー物質含まない非常食を備蓄
 →オムツやウェットシートなどの生活必需品や、
 乳児向けの物資を用意

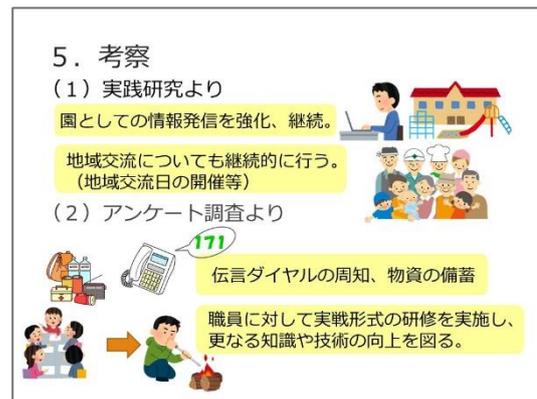
ウ) 子どもが騒いで大変
 →安心できるような預かり体制を整える



5. 考察

(1) 実践研究より
 園としての情報発信を強化、継続。
 地域交流についても継続的に行う。
 (地域交流日の開催等)

(2) アンケート調査より
 伝言ダイヤルの周知、物資の備蓄
 職員に対して実践形式の研修を実施し、
 更なる知識や技術の向上を図る。



6. おわりに

保護者へのアンケートを通し、保護者のニーズを把握することができた。それを基に公衆電話の場所や使い方や非常食を工夫して食べやすくする方法などの情報を保護者に提供したが、まだ多くの情報発信が必要と感じる。

今後の課題は、大きく二つに分けられる。一つ目は地域交流。二つ目はステーションの周知と更なる機能化である。

地域交流に関しては、フレンドシップデーにおける地域の方の参加が7世帯だけであった。出前保育の際やポスターを使って告知を行ったが、『地域の人々と互いにつながり顔見知りになる。』という点から見ると、少ない数だと感じる。だが、今後も地域交流日や日々の行事等を通し、地域の方とつながって行く事で、その数も徐々に増えていくのではないかと考える。

ステーションの周知と更なる機能化について。周知に関してはフレンドシップデー開催時に、ステーションの事を如何にして伝えるかという話題は出ていた。しかし、内容を精査していく段階において、防災の観点について重きを置いてしまった。この反省から、今後も地域交流日等を利用することでステーションの周知を計っていく。機能化に関しては、先述のように研究過程において学んできたことやアンケートから今後の支援や方針は決めることが出来た。だが実行していくためには、立てた計画や方針をステーションの更なる機能化に直結していく必要があると考えた。また、機能化の為の一つとして、非常時に迅速に動くことができるように職員に対して実践形式のシミュレーションの研修も合わせて計画・実行していく。

このように、自園としての取り組みや準備を念入りに行っていく事が『地域の子育て家庭への支援の充実』に繋がると考える。

引用文献 相模原市私立保育園園長会防災体制ワーキング(企画)(2015),『災害時乳幼児支援ステーション解説・運営マニュアル』相模原市私立保育園園長会発 54

参考文献

- 1) MAMA-PLUG (2016), 子どもを守る防災手帖——被災ママ 1089 人の声に学ぶ!——, KADOKAWA
- 2) 丸谷充子・吉澤一弥・岩治まとか(2018),「熊本地震で被災した保育所・子育て支援センターの調査(2)——くまもとプロジェクトのアンケート調査結果——」,『日本保育学会第71回大会発表要旨集』, pp. 840.
- 3) 内田紀子(2017),「地域の子どもは地域で守る!——保育所を「災害時乳幼児支援ステーション」に——」,『ぜんほきょう』, 285, pp. 8.